

2016年10月30日 主日礼拝説教(要旨)

聖書：ルカによる福音書 16章 19～31節

説教：「聖なる逆転」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

地上において大金持ちであった人と、最も貧しかった人とが、死を境に全く逆の立場におかれるというどんでん返しのたとえを主イエスはお語りになりました。けれども注意すべきことは、これはあくまでもたとえ話だということです。天国と地獄の様子を報告しているのでも説明しているのでもありません。フィクションであり、いわばイメージ映像です。これとよく似た話は、昔からエジプトにもユダヤにもあったようです。人々がよく知っていた説話などを利用し、アレンジして、主イエスはこのたとえ話を作られたのかもしれませんが。

では、主イエスが語られたこの話において逆転劇はどのように起こったのでしょうか。大金持ちについては、「いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた」(19節)とあり、貧しい人については、「この金持ちの門前にラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、その食卓から落ちる物で腹をみたしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた」(20、21節)とだけ書いてあります。金持ちがあくどい商売をして大金持ちになったとか、ラザロは極貧であったが、信仰深く、正しい人であったとは書いてありません。もしそうであれば、私たちはこの逆転劇に納得し、喝采し、楽な気持ちでこの話を聞くことができるでしょう。ところが、主イエスは登場人物の善と悪、信仰と不信仰については何も語ってはおられないのです。

むしろ、主イエスがここであざやかに描いておられるのは、二人の近くて遠い関係です。ラザロのところに犬はやって来ましたが、金持ちは来なかったのです。金持ちはラザロのことを見てはいましたが出会ってはいなかったのです。そして、死んだ後、金持ちはラザロをよこしてほしいとアブラハムに願いますが、それはできないと言われてしまうのです。金持ちの贅沢な生活の背後にやましいことはなかったのかもしれませんが。けれども、神は人が独りだけで満ち足りていることを喜ばれないのです。隣人と共にあり、喜びと悲しみを隣人と共にしながら生きることを望まれるのです。そう考えると、この話は私たち一人一人に対しても問いかけています。神は私たちにさまざまな賜物を与え、また私たちの傍らに、隣人ラザロをも置いていてくださっています。そのことに気づかず、隣人と共にあろうとしないなら。永遠の世界でも共に生きる喜びにあずかれないのです。

たとえ話では貧しい人の方にだけラザロという名前がついています。その名前は、ヘブライ語のエレアザルがギリシア語化したもので、「神は助けてくださる」という象徴的な言葉です。まさにここに、ラザロが死んで神の用意された慰めと安息に入れられた理由と根拠があります。ラザロに功績や取り柄があったわけではありません。ただ神の

恵みと憐れみによって、神の顧みを受け、神に助けられて、ラザロはアブラハムのところに引き上げられたのです。

ラザロについて思い巡らすとき、私たちはそこにこのたとえ話を語っておられる主イエス・キリストのご生涯を重ね合わせることができるのではないのでしょうか。主イエスはこの世に来られて貧しい人ラザロの場所に立たれました。主イエスは悲しみの人で病を知っておられました。そして最後は、都の門の外で、強盗どもと共に十字架にかけられ、恥ずべき姿をさらしながら命を捨てられました。その死は、助けなきラザロと共にある死、すべてのラザロを救い出すための死でありました。主イエスは、神が引き上げてくださらなければ救われない人の友となり、兄弟となり、救い主とされました。

このような主イエス・キリストのことを思う時、私たちも実は一人のラザロに過ぎないこと、主のあわれみと赦しによって引き上げていただかなければ到底救われない者たちであることを知らされます。金持ちの方には名前がついていませんが、この金持ちもまたラザロと名づけられるべき存在ではなかったのでしょうか。門前のラザロを見ながらも、自らもまたラザロであることに気づかなかったこと、共に生きるほかないラザロとして神の前に立たなかったことこそが、金持ちの問題であったのではないのでしょうか。

さて、このたとえ話は後半の部分にも大事なポイントがあります。自分の願いが退けられた金持ちは、まだこの世にいる自分の兄弟たちがこんな苦しい場所に来ることがないように、ラザロを地上に遣わして警告してほしいとアブラハムに求めています。しかし、この願いも聞き入れられませんでした。「お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい」(29 節)。この世にいる人々には聖書の言葉があるではないか。聖書の言葉を聞いているではないか。それでも生き方を改めないのであれば、たとえどんな不思議や奇跡が起こり、誰が死者の中から生き返っていたとしても、それによって悔い改めることは起こらないであろうというのです。聖書を通して神が私たちに語りかけておられる御声を聞くこと、御言葉によって心動かされること、それができないというのであれば、他に誰が話に行っても、どんな不思議なことが起こっても、何の役にも立たないのです。

モーセの律法と預言者が私たちに与えられ、律法と預言者が証する神の御子イエス・キリストが私たちのために来られ、私たちのために十字架にかかり、死者の中から復活してくださいました。私たちが聞くべき神の言葉はここにすべて与えられています。私たちがどう生きるか、富める者として、貧しい者として、神の前で隣人たちと共にどう生きるか、それを教え示してくれるのは聖書の御言葉です。私たちにはいのちの道を行くための豊かな指針と励ましが与えられているのです。